

父が亡くなった。九十一歳だった。二年ほど入退院を繰り返していた。まだ大丈夫と気を抜いていた。妻と子供たちを連れて郷里に帰った。告別式で母と兄は声を上げて泣いた。私は、泣けなかった。母と兄の震える肩をただ眺めていた。父が嫌いだった。

父は長年、国鉄とJRに勤めた。仕事ぶりは真面目で、ギャンブルに手を出すこともなかった。酒が好きで、酔うと陽気になった。

ただ、思ったことを何でも口に出した。相手の気持ちを考えることがなかった。

高校時代、父と洋服を買いに行ったことがある。試着した私に、「キツイんじゃないろう。もっと大きいのにせえ」と大声で言った。太っていることがコンプレックスだった私は、店員や他の客に聞かれるのがたまらなかった。

高校では弓道部だった。父が見に来た練習試合でミスをしたことがある。それを親戚みんなの前で話した。酒の席で、場を盛り上げるために、大声で笑いながら。私が大学生になっても、働くようになって、結婚して子供ができて、三十年以上笑い話にした。

子供を実家に連れて帰った時、幼い息子に「お父ちゃんと海に行くなよ。お父ちゃんは泳げんのじゃけえ、おぼれても助けて貰われんど」と言った。

そんなことが何度もあった。冗談のつもりだろうが、いつも人を馬鹿にして笑いの種にした。それがたまらなく嫌だった。

初七日の法要をその日のうちに済ませ、実家に戻った。兄の息子たちに会うのは半年ぶりだ。遺骨を前に、家族で父の悪口を言い合った。

母は「人を褒めることのない人じゃった」と言った。新聞やテレビを見ても、文句ばかり言っていた。私がギターを弾いても絵を描いても、下手くそじゃ、としか言わなかった。

兄は、幼なかつた兄の息子たちへの態度に文句を言った。「長男だけを可愛がって、買物とか遊園地とかに連れて行きよつた。下の子がわあわあ泣いてもほつたらかしじゃけえ。」

私の子供にもそうだった。息子だけを可愛がり、妹は「あの子は駄目じゃ」とはなから決めつけていた。

母は、植木市で父が「うちのがもつと立派なのがありますけえ。持って来て見せましようか」

と店員に言った話をした。

「恥ずかしゆうと一緒におられんじやった。」

テレビショッピングで見た物を、すぐ欲しがって買った、とも言った。兄嫁が続けて、「ほいでも、使ったのを見たことなかったんよ。」

父の身勝手さと言葉の迷惑さを、みんなが口々に並べたてた。

その時、開け放った窓から一匹のホタルが飛びこんできた。

六月の半ば、ホタルには早過ぎる季節だ。

「おっ、ホタルじゃ。」

兄が驚いて言った。

みんなの目は、天井近くを漂う小さな光に注がれた。

「悪口を言いよらんか、お父ちゃんが見に来たんかね。」

母がつぶやいた。

ホタルは部屋の中をふわふわと、円を描いて舞った。

そして、窓から夜空へと消えた。

別れを告げるように。

私の息子は大学生になった。

ろくに口をきかない。「おはよう」の挨拶もなく、仕事から帰った私に「おかえり」の一言もない。休日はアルバイトもせず、自分の部屋にこもりつきりだ。

ときどき、面倒をみるのが嫌になる。

父はどうだったろう。

あの頃、私も反抗期だった。父は嫌がられても私を食事や買物に誘い、旅行に連れ出した。大入学入試にもついて来たし、一人暮らしのアパートにやって来て、洗濯や掃除をした。抜けた床を直すため、アパートの床下にもぐりこんだこともある。

年をとって生まれた末っ子の私が可愛かったのだろう。

私は心を開かない息子に、こんなにしてやれるだろうか。

そう思うと、父の有難さが身に沁みる。

口が悪く、子供みたいなどころはあったが、それを差し引いても良い親父だったのだろう。

亡くなって三年経って、そう思う。

最近、父に似てきた、と妻に言われた。